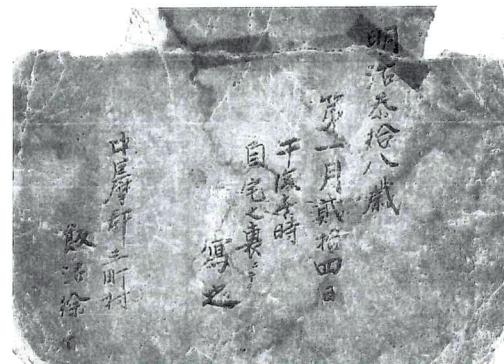




生家で見つかった家族写真



写真の裏書き

## 「万世一系」の天皇が 日本歴史

拓殖大学学事顧問・前総長  
**渡辺利夫**



### わが家族の肖像

私は奉職する大学で「日本近代史」の講義を担当しています。初回と第二回の講義では、歴史に薄い関心しかもたない学生に対して、近代史を少しでも自分たちに身近なものとして理解してもらいたいと考え、次のようなエピソードから話を切り出します。

私が生まれ育ったのは山梨県の甲府市です。甲府は四方を峻険な山々

員を集めて撮った記念写真です。祖父の胸には、いくつかの勲章が垂れています。墓誌で確認したとこ

ろ、祖父は日露戦争の十年前の明治二十七年の日清戦争にも出征し、その軍功により賜つたものがこの勲章であることがわかりました。祖父が履いているのは草鞋です。出征後、この草鞋で満州の荒野を転戦したのでしょうか。

左端で幼児を抱えているのが、私の祖母です。その幼児が

私の母です。祖父の両隣に映つている二人の女の子は、母の姉です。右側の二人の老人が祖父の両親、つまり私の曾祖父母です。後列の二人の女性は、祖父の姉と妹です。日露戦争が勃発した時点で私の母は出生しており、その母が長じて結婚し、五人の子供を産み、その一人が、諸君の前でいまこうやつて話をしているこの私です。

## 出生という運命

日清戦争や日露戦争といえば、明治維新後の日本の興廃を決定した大変に重要な戦争です。しかし諸君には、日清戦争も日露戦争もはるかに遠い昔の戦争で、この二つの戦争が現在の私どもになんらかの形でつながっているという感覚は、もう完全に失われているのかもしれません。しかしどうでしょう、この写真を

に囲まれた山国の中です。甲府のわが生家、建てられてからもう五十年ほど、すっかり老朽化してしまっては住む者が誰もいなくなりました。廃屋をそのままにしておくわけにはいかない。長兄から相談を受け、この家を解体することにしました。

解体する前に、古びてしまつた道具を整理していたところ、二階の奥またところにおかれている引き出しから一枚の写真が出てきました。立派な装丁で、撮影した写真館の名

前も刻印されています。台紙の周辺はボロボロですが、写真自体ははつきりとみえます。

この写真に登場する九人の血族のうち、一番の幼子が私どもの母親だと長兄から聞かされ、はつとわが胸を衝かれました。裏書をみると、明治三十八年一月二十四日。山梨県中巨摩郡三町村にて撮影、と書かれています。中央の軍服姿の男性が、私の母方の祖父です。この祖父が、日露戦争に出征する日の朝、家族の全



ギルバート・チェスターントン(写真／ウィキペディア)

のは、人間社会の「表層」だけです。  
「深層」のほうはほとんど変わっていないのではないか。

私は、人間の社会は進歩すると考  
える「進歩史観」の立場をとりませ  
ん。むしろ人間存在は、同じことを  
繰り返すものだと考える「循環史観」  
の立場を支持します。それがゆえ  
に、私どもは先人の絶望と歓喜のな  
かに学ぶべきを学んで、いまをより  
よく生きるための知恵を得たいので  
す。これが歴史を学ぶということの  
一人の「旅人」だと思うのです。

この現世を構成しているのが生者だけだというのは、と  
んでもない勘違いです。死者は社会のまぎれもない構成員  
なのです。死者は死者であるがゆえに、声を発することは  
できません。しかし、生者は死者の声を聞きながら生き  
る、そういう観念を失った社

は、脈々と連なる血族のなかを流れ  
ながらいま生きてあるのだ、という  
実感を深くします。

諸君の誰にもご両親がおられま  
す。そのご両親のそれに二人ず  
つのご両親（ご祖父母）が、さらに  
は四人ずつのご両親（ご曾祖父母）  
がおられます。さらに、そのまたご  
曾祖父母を産んでくれた幾世代もの  
祖先のことを想像してみますと、そ  
の数は幾何級数的に増加して大変な  
数になります。このきわめて多くの  
祖先の人々のうちのたった一人が欠  
けても、諸君はいまここに存在して

眺めますと、それほど縁の遠いもの  
とも思われないのでないでしよう  
か。いま、諸君の前でこうやって話  
をしているこの私の、たった三代前  
の血族の写真なのですから。この写  
真を見るたびに私は、私という存在  
が私という個人のものであるより  
は、脈々と連なる血族のなかを流れ  
ながらいま生きてあるのだ、という  
実感を深くします。

そのように考へれば、自分が存在  
していることが「奇跡」のように感じ  
られませんか。私どもの存在は、実  
に「運命的」なものだということに気  
づかされるのではないでしようか。  
これを運命といわずしてなんといえ  
ばいいのでしょうか。諸君は両親を  
選ぶことはできません。血脉を選ぶ  
こともできません。諸君は、その出  
生自体が運命的なのです。

はいないです。

私どもの肉体や精神、性差、体つ  
き、性格、その他さまざまな属性は、  
細胞内に精細に組み立てられた遺伝  
子の情報伝達メカニズムを通じて、  
世代間で継承されてきたものです。

諸君はいま、なにかに迷い悩み苦  
しみ、逆になにかに喜び幸せを感じ  
ていますよね。しかし、諸君のご両  
親もご祖父母もご曾祖父母も、その  
また祖先も、諸君と同じように迷い  
じてきたのでしょう。諸君と血縁で  
連なる人々も、諸君と同様の絶望と  
歓喜に、時に胸を塞がれ、時に躍り  
上がっていたにちがいないのです。

通信技術や輸送技術などは恒常的  
に進歩し、その進歩に追いつくのが  
難しいほどです。しかし人間存在  
は、それほど容易に変化したり進歩  
するものではありません。

人間が出生し、成長し、成熟し、  
死にいたるプロセスは不变です。人  
生の過程で、絶望し、歓喜するその  
人々の人生のありようは、古来、不  
変なのではないでしょうか。「生老病  
死」というライフサイクルのなかで、  
人はいつの時代にあっても、同じ  
ようなことに絶望し、歓喜してきた  
のでありますよ。しかし、諸君のご両  
親もご祖父母もご曾祖父母も、その  
また祖先も、諸君と同じように迷い  
じてきたのでしょう。諸君と血縁で  
連なる人々も、諸君と同様の絶望と  
歓喜に、時に胸を塞がれ、時に躍り  
上がっていたにちがいないのです。

Hanada-2019年6月号 ◎ 272

意味です。

「生者と死者」という言い方がありま  
す。現世に生きている者が生者です。  
私という生者を生み育んでもくれたも  
ののほとんどが死者です。私の祖父  
母も父母もとうに死んでいます。生  
者は、死者があつて初めて生者な  
です。この生者も、いずれ死者とな  
ります。死者がなければ生者も存在  
しないのです。私ども生者は、祖先  
からつづく長い血脉のなかを生きる  
一人の「旅人」だと思うのです。

会は「根無し草」のように危ういと考  
えねばなりません。

**死者の民主主義**

逆説と諧謔をもって知られるイギ  
リスの思想家に、ギルバート・チエ  
スターントンという人物がいます。少々  
ラディカルな発言のように思われる  
かもしれません。氏は次のように思  
っています。ちなみに、ラディカル  
という語彙の原義は「根源的」です。  
私どもをはっとさせる刺激的で、し  
かし真実に迫る文章です。「死者の民  
主主義」という考え方です。

「単にたまたま今生きて動いている  
というだけで、今の人間が投票権を  
独占するなどということは、生者の  
傲慢な寡頭政治以外の何物でもな  
い。伝統はこれに屈服することを許  
さない。あらゆる民主主義者は、い  
かなる人間といえども単に出生の偶

273 ◎ Hanada-2019年6月号

然によって権利を奪われてはならぬと主張する。伝統はいかなる人間といえども死の偶然によつて権利を奪われてはならぬと主張する。……我々は死者を會議に招かねばならない。

古代のギリシャ人は石で投票をして貰わなければならぬ。これは少しも異例でも略式でもない。なぜなら、ほとんどの墓石には、ほとんどの投票用紙と同様、十字の印がついてゐるからである」(『正統とは何か』福田恒存・安西徹雄訳、春秋社)

幾世代にもわたり「民草」が共通して感じてきたこと、考えてきたこと、これこそが「伝統」なのだとチエスターントはいつています。伝統にこそ耳を傾けるべき価値があるのだ、といつてゐるわけです。チエスターントは「現世中心主義」の思想を徹底的に嫌悪しているのですが、その思想の

貴わなければならない。これは少しも異例でも略式でもない。なぜなら、ほとんどの投票用紙と同様、十字の印がついてい

るからである」(『正統とは何か』福田恒存・安西徹雄訳、春秋社)

幾世代にもわたり「民草」が共通して感じてきたこと、考えてきたこと、これこそが「伝統」なのだとチエスターントはいつています。伝統にこそ耳を傾けるべき価値があるのだ、といつてゐるわけです。チエスターントは「現世中心主義」の思想を徹底的に嫌悪しているのですが、その思想の

基調に私も強くうなずいています。

ここまでは、私どもが現世に生きてあるのは実に運命的なことだ、という主旨のことを述べてきました。

しかし、私どもにはもう一つの運命的な存在があります。生者も死者も、「國家」という文化的・政治的な

共同体の成員として生きてあるところです。大変にわかりやすい例でお話ししてみましょう。

### 「無国籍者」は許されない

諸君も、観光旅行や海外留学などで外国に出かけた経験がおありでしょう。その際、諸君が必ず携行しなければならないものが、旅券(パスポート)ですね。これがなければ、そもそも日本を出国することも、外國に入国することも不可能です。旅券を開くと、次のことが日本語で、次いで英語で書かれています。

諸君が外国に入国する時には、入国審査官がこの英文を読み、諸君が正当な手続きを経てこの旅券を所持、入国しようとしている日本の「公民」であることを確認し、入国許可のスタンプを押してくれるはずです。

とができないのと同様に、国家を選ぶこともできません。国籍変更も、条件が整えば不可能ではありませんが、今度は移籍した国の公民として生きざるを得ないのです。「無国籍者」として生きることを人間は許されていません。

この事実に変わりはありません。國家とは、私どもにとつてのもう一つの運命的な存在なのです。

諸君が旅券の取得を申請する場合

には、戸籍謄本を提出することが義務づけられています。諸君が、まぎれもなく特定の日本人家族の一員であり、日本のどこのかの居住地で生まれた人間だということを証明する書類です。両親、家族、地域社会、国家の公民であることを証すこの戸籍謄本がなければ、私どもは旅券を入れ手できません。

国家といふものは、そのなかに生まれた人間にとつては運命的な存在の枠組みです。私たちは親を選ぶこ

次に、日本という国家は他国とは異なるどういう伝統をもつた国家なのか、つまりは日本という国家の独立性について考えてみましょう。

私は、日本の伝統の特質は二つのキーワード、一つは「同質的」、一つは「自成的」、三つは「連續的」という形容詞で語るのが適切だ、とかねてより考えてきました。

日本は四方を海で囲まれた「海洋の共同体」です。同一の国土のなかで、ほとんど同種の人々が、他国で

日本国民である本旅券の所持人を通路故障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を与えられるよう、関係の諸官に要請する。

日本国外務大臣

*The Minister for Foreign Affairs of Japan requests all those whom it may concern to allow the bearer, a Japanese national, to pass freely and without hindrance and, in case of need, to afford him or her every possible aid and protection.*

は使われてない、その意味で「孤立的言語」である日本語(「国語」)を用いながら、生を紡いできました。宗教上の争いが、日本に亀裂を生じさせることもありませんでした。第二次大戦直後の連合国軍司令部(GHQ)による支配を別にすれば、日本が他の占領下におかれることはありません。同種の人々が孤立的言語の国語を用い、宗教上の亀裂もない「同質社会」、これが日本の大きな特質です。こういう「同質社会」は、世界でも日本以外に探し出すことは難しいのではないでしょうか。

日本も、古代律令国家の時代にありますては、国家形成のために中国から多くのことを学びました。しかし、唐王朝が滅亡するあたりより、大陸からの影響力は次第に失せていました。そして、日本独自の国家秩序が形づくられ、七世紀の初めに

は「天皇」という特有の称号と固有の年号が設定され、国名も「日本」とされるようになったのです。以来、一千三百年を超える連綿たる歴史が紡がれてきました。繰り返しますが、日本は世界史上に類例をもたない同質社会です。

日本が同質社会であることは、中國と比較してみれば歴然とします。

中国の歴史を彩るものは、王朝の反復転変史です。易姓革命と呼ばれます。徳を失った皇帝は、新たに天命を授かった支配者によって命を革められます。これが「革命」です。また、皇帝の姓もまた易められるのですが、これが易姓です。革命の「革」も、易姓の「易」も、いずれも「あらためる」という意味です。

中国では、北方の遊牧民族や騎馬民族による征服王朝が、しばしば出現しました。近くはモンゴルによる

元朝、もっと近くなりますと満州族による征服王朝が清朝です。つまり、多様な民族の混淆する「異質社会」が中国です。人類学の用語法でいいますと、同質社会日本の発展が「自成的」つまり自ら成ったものである一方、異質社会中国の発展は「他成的」つまり他文明の影響を徹底的に受けて形成されたものです。

## 天皇は歴史の象徴である

それゆえ、日本の歴史が連続的である一方、中国の歴史はきわだつて非連続的です。異民族による征服、権力内部の大逆や謀反、内乱に彩られたものが中国史です。対照的に、日本ははるかに平穏な歴史を織り紡いできました。同質的で自成的で連續的な歴史をもつ日本人の体质がそうさせたのであります。日本はやはり「海洋の共同体」なのです。

日本人は、一体、どうしてこんな厄介なことをやりつづけてきたのでしょうか。日本の歴史の連続性を再確認するための嘗為なのである、と私は想像しています。日本の歴史に一千三百年の歴史があります。

日本人は、一体、どうしてこんな厄介なことをやりつづけてきたのでしょうか。日本の歴史の連続性を再確認するための嘗為なのである、と私は想像しています。日本の歴史に一千三百年の歴史があります。

私が同質的、自成的、連続的の三つの形容詞から日本史をみつめることを提案しているのですが、このなかで「連続的」という形容を、目に見える形で表象している一つの重要なしきたりについて話してみたいと思います。

伊勢神宮には式年遷宮というしきたりがあります。直近では平成二十

五年に執り行われました。二十年ごとに内宮と外宮の二つの正殿、十四の別宮を造り替え、神座を遷すというしきたりです。持統天皇治世の西暦六九〇年に始まつたものですから、平成二十五年の遷宮は六十二回目、実際に一千三百年の歴史があります。

日本人は、一体、どうしてこんな厄介なことをやりつづけてきたのでしょうか。日本の歴史の連続性を再確認するための嘗為なのである、と私は想像しています。日本の歴史に一千三百年の歴史があります。

## 元日や一系の天子不二の山

私は、同質的、自成的、連続的の三つの形容詞から日本史をみつめる

ところを提案しているのですが、この

なかで「連続的」という形容を、目に見える形で表象している一つの重要なしきたりについて話してみたいと思

います。

伊勢神宮には式年遷宮というしき

たりがあります。直近では平成二十

五年に執り行われました。二十年ご

とに内宮と外宮の二つの正殿、十四の

別宮を造り替え、神座を遷すという

しきたりです。持統天皇治世の西暦

六九〇年に始まつたものですから、平

成二十五年の遷宮は六十二回目、実

に一千三百年の歴史があります。

日本人は、一体、どうしてこんな

厄介なことをやりつづけてきたので

しょうか。日本の歴史の連続性を再

確認するための嘗為なのである、

と私は想像しています。日本の歴史

に一千三百年の歴史があります。

日本人は、一体、どうしてこんな

厄介なことをやりつづけてきたので

しょうか。日本の歴史の連続性を再

確認するための嘗為なのである、